
Lost Pride

名賀 はじめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lost Pride

【Nコード】

N0481M

【作者名】

名賀 はじめ

【あらすじ】

「あなたは、夢を捨てた事はある？」

事故により片目の視力を失い、夢を諦めた少年。自らの意思で夢を捨てた少女。

高校入学を目前に控えた二人はふとした偶然により出会う。しかしこの偶然の出会いが、後に二人の人生に大きな意味を持つことになる。

お互いは何を想い同じ時間を過ごしてゆくのか。

学園青春(?)ストーリー！。恋愛モノにもなるかも…。初投稿作品

です。

【第一章】プロローグ（前書き）

初投稿作品です。

まだ慣れていないですがこれから頑張っていこうと思います。

未熟者故、不定期更新になると思いますが、どうぞよろしくお願ひします。

まだプロローグなのであまり大きな動きはないです。

【第一章】プロローグ

人間の五感、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚。

この中でも人の行動のほとんどは視覚に左右されると思う。

例えば、両目を塞げば何も見えないのは当たり前として、片目を瞑っただけでも視界の半分はシャットアウトし、立体感や距離感も掴めなくなる。

それに人って対象を目で見て、それで物事を判断するでしょ？

大きい小さい、広い狭い、そのモノの色や形、時には善悪の判断まで。

いや、まあだから何だって訳じゃないけど、つまりはそれだけ視覚ってというのは大切ってこと。

片目が見えないってなると日常生活でも不便だし、もしスポーツマンとかならそれこそ致命的だ。

…と、ここまでこんなグダグダと目の見えるありがたさを説いてきた訳だが、何故いきなりそんな話をしたかというところ。

まあ、俺も去年まではスポーツマンだった訳で。

俺も目のありがたさを心に刻まれた訳で。

「……………笑えねえ」

泣きたくなくなるね。

気持ちの最終整理のためにやって来た海岸沿いの道を歩いている訳だけど、来てみれば整理どころか未練ばかりが募るばかり。

…まあ、それで取り乱したりなんかはしないけどさ。

海岸沿いはやっぱり風が強い。

波の音も、潮風の匂いも、風に揺れる伸びてきた前髪の感触も確かに伝わってくる。

ただ俺の視界はいつも半分しか光を映さない。

まあ、そういうこと。

「…我ながら女々しいねえ」

ひとり苦笑いを零して呟く。

最近は何とごことが癖になって来たのかもしれない。

別に悲しいとか悔しいとか、絶望に打ちひしがれてるとか、そんな悲観的な感情は持ち合わせてはいない。

いや、そりゃ見えなくなっただけの時は辛かったけれどさ。

今となつては思ったとして『なんだかなあ…』程度のもの。

人間の慣れとは恐ろしい。

でもまあ、今はその『なんだかなあ…』が厄介な訳で。

それを取り除きたくてここまで来た訳で。

「この辺も久しぶりだなあ」

つい最近までずっと受験のことではいっぱいだったし。

それも終わってつまりもうすぐ高校デビュー。

せっかくの新生活を『なんだかなあ…』でスタートするのはやはりいやな訳で。

小さいときからのとっておきの場所に向かっているという今この時。三月の海の風はまだまだ肌に痛かった。

しばらく海岸を歩いていると、ほとんど人気のないポイントに辿り着く。

大きな岩の壁と壁に囲まれた場所。

半円状のその場所の中央には、いい感じに削れてテーブルみたいになっっている大きめの岩。

うん、岩まみれ。

そのテーブル岩に腰かけて通り抜ける風を受けながら呆けてるのが俺のいつもの在り方なんだけれど。どうやら今日は先客が居たらしい。

テーブル岩に腰掛けているその少女は、腰まで届きそうなほど長い髪を潮風に流されながらも、それを気にした様子も無く、口元で何かを呟いている。

いや、あれは呟いているというよりも……。

「歌っている？」

なんとなくだけどそんな感じがした。

まあ、だからなんだと言う訳じゃないんだけど。

しかし、参った。此処なら誰も来ないだろうって思ってたし、実際此処に来る人なんて殆どいない。

だからこそとっておきの場所だったし、静かに物思いに耽るのに適していたというか。

でも今は今は見知らぬ少女が居る訳で。

とは言っても別に此処が俺の所有地って訳じゃ無い訳で。

「誰？」

「……誰といわれても」

見つけた。

そりゃそうか。ずっと突っ立って考え事してたら普通見つかる。

怪訝そうにした表情でこちらを見ている見知らぬ少女。

一瞬、彼女の黒く澄んだ瞳に飲み込まれそうになる。

「散歩の途中に立ち寄っただけな訳で……」

「…そう」

綺麗な黒で癖の無い長髪。
整った顔立ち。

初対面での第一印象だけど、素直にかわいい娘だな、と思った。

まあ、同じ年の女子達と比べたら若干背が低いかもしれないけど。

「…あなた、今何か失礼な事考えなかった？」

「…とんでもない」

エスパーか何かだろうか？

それとも俺は考えている物事が表情に出やすい人種なのだろうか？

「初対面でそんな事、考えるわけ無いよ」

「…そう、ならいいけれど」

まあ、考えていたんだけど。

いや、でも小さいって思う事は失礼な事なのか？

女の子って『小さくてかわいいね』的な事言われると嬉しかったり
しないのかな？

……。

うん、失礼な気がした。

「さっきの、歌ってたの？」

「…え？」

ふと、気になった事を聞いてみた。

ただ、帰ってきた返事は……。

「ねえ」

「…何さ？」

「あなたは、夢を捨てた事はある？」

聞きたかった答えではなかった。

「…まあ、あるっちゃあるのかな？」

「…そう」

そう言っで一拍空ける見知らぬ少女。

「でも、きっと私の言っている事とあなたの思っている事は違うわ」
「だろうね、まあそれは初対面だし仕方ない訳で」

それで相手の考えがわかればそれはもうエスパーだ。
あれ、エスパー少女なんだっけ？

「…あなた語尾に訳でっけて付けるの癖なの？」
「…他人に言われて気が付く自分の癖ってあるよね」
「理屈っぽく聞こえるからやめたほうがいいわよ？」
「初対面で辛口コメントありがとう」

お互い無言になる。

まあ、自分でも解ってるんだけどね、理屈っぽい。

「…もう行くわ」

「そうかい」
「それじゃ」

別れ際は随分とあっさりしたものだと思う。

初対面で多く語ることも無いんだろっけねどね。

俺は彼女が歩いていく後姿を眺めながら、テーブル岩の上で風を受けていた。

「…なんだかなあ」

眩くしかない、そんな心情の三月の海。

俺は高校生になります。

【第一章】入学と親友と再開

季節は春。

月で言うと四月。

中学時代の必死の受験勉強により試験に合格した俺は、真新しい制服を身に着け、今日から母校となる高校へ向けてやや急な坂を下っていた。

遠くに見える海から運ばれた潮風が前髪を攫い、瞋ったままの右臉をくすぐる。

周りには何人か同じ高校に向かっているであろう生徒の姿が見える。制服が同じだから一緒だろう。

といっても男子の制服は学ランなので別の学校でもわからないとは思っけれど。

でもこの辺りの地元の人たちは大体が同じ学校なので間違いないと思う。

別の学校に行くとなると駅で電車に乗らないといけないので、遅刻の生徒以外同じ時間に鉢合わせる事はないらしい。

その辺、地元の学校だと登校に余裕が持ててありがたいと思う。

家からだと少しばかり距離があるが、優雅に歩いて登校できるのは大きなメリットだろう。

「ユウ」

坂を下りきった所でよく聞きなれた声に呼び止められた。

声のした方を向くと、中学一年以来の親友がいつものすまし顔で近づいてくる。

「よう弘一、おはよう」

「ああ、おはよう」

木下弘一。^{きのしたこういち} 比較的少ない俺の友人の中でも親友と言える存在。出会ったのは中学の時の入学式だった気がするが、どうだったかな。

「うん、今日も晴れてよかった」
「そうだな」

何気ない俺の一言に短く返しながら、弘一は俺の右隣りに並び歩き始める。

俺と歩く時弘一はいつも右側。

コイツは本当にそうだった細かい所に気を配る事ができる。

弘一が俺の右に並ぶ理由は、別に弘一が右側大好き人間だというわけではない。

俺は右目が見えない。

比喩表現ではなく実際に見えないのだ。

昔、といってもホンの1・2年前の事だけど、俺は右目を失明した。原因は交通事故。

信号無視した自動車が突っ込んでくるという、何とも笑えないようなお約束的事故で俺は大きな怪我をってしまったわけだ。

当時は凄まじかった。

右腕も骨折やら筋肉断裂やらで酷かったけれど、それ以上に右目が見えなくなったことはシヨックが大きかった。

実は当時、事故が起きるまでは俺はボクシングの選手だったりした。自慢じゃないけれど、実力はあつた方。

小さい頃に親戚のプロボクサーの人に教えてもらってからずっと、それこそ俺の人生の全てを捧げてもいいなんて勢いで練習してた。周りからも将来プロ確定だとか、中学にボクシング部があれば学生チャンピオンだったとか、今思えばそんな評価を受けて若干舞い上がっていたかもしれない。

当然高校もスポーツ推薦でボクシングの名門校に行く予定だった訳

だが……。

そんな事を思っていた中学二年の頃、事故にあった訳で。

右目も見えないし、右腕も無理な動きはできなくなった訳で。

当然医者からはもうボクシングは続けられないと言われてしまった訳で。

その時、プロになるのが自分の夢だったと自覚して、時間も忘れるくらい泣いて暴れて騒いだ気がする。

後になって知ったんだが、その時色々な処のボクシングジムや格闘技の道場で『天才事故に散る』なんて噂が流れたと聞いて本気で驚いた。

でまあ、弘一はその時ろくに動けない俺の世話とかもしてくれた。何故弘一が？っていうのもあるが、片親で親父もいつも忙しい俺にとっては非常に助かった。

まあ、あの時はかなり荒れていたから迷惑の掛けっぷりも半端ではなかったと思うのだが。

で、リハビリも終わって無事退院してからも、さりげなく見えない右側に立ってくれたりとかと心配りしてくれるわけだ。

そりゃ親友とも呼びたくなるね。

因みに親族やボクシング関係以外で右目が見えないのを知っているのは弘一と学校の先生達だけだ。

「同じクラスだといいな」

「そうだな」

俺の言葉に、やはり短く返事をする。

いつも冷静で周りの状況をしっかりと見極められる。

勉強も運動もできて、しかもそれを鼻にかけたりしない。

そして細かな心配り。

偶に、何でこんな完璧な奴が俺の親友でいてくれるのか疑問に思う。本人曰く『俺は完璧なんかじゃない』だそうだが、どうか。

因みに背は178cmと高いし顔も悪くない。
やっぱり完璧じゃねえか、と何度呟いた事か。

「高校デビューねえ・・・」

「実感が湧かないか？」

「そりゃあ、まあ、制服も変わらず学ランだし？」

「確かにな」

親友となんて事の無い会話をしながら通学路を歩く。
こんな時間が、今は何より気分が良かった。

「弘一、何組だった？」

「ユウも俺も、同じ3組だ」

クラス訳の名簿を見に行っていた弘一が戻ってきたので、結果を聞いてみた。
運よく同じクラスみたいだ。

「って事は、少なくとも後一年は同じクラスって訳だ」
「そうなるな」

思えば中学の時から数えて4年目だ。
コレって結構凄い事じゃないかな？

「まあ、改めてよろしくな」
「ああ」

なんとなくそんな気分になったので弘一に握手を求めると、直ぐに

返してくれた。

その後二人して教室に向かう。

お世辞にも新しいとは言えない、でも古めかしいとも言えないような、なんとも中途半端な貫禄を漂わせている校舎。

今日から俺たちが通うことになった学校、市立町枝高等学校。

町枝っていうのは特に特別な意味があるとかじゃなくて、単に此処の市の名前が町枝市ってだけな訳で。

町枝市は海と灯台が象徴的な田舎町だ。

ちなみに町枝の海は遊泳禁止、波が荒いのだ。

そんな処に建てられているこの学校は地元暮らしの生徒が多い。

つまり中学の時の同級生が多いのだ。

教室を見つけ中に入る。

席は決まっていけないようなので、適当な場所に座って待機。

中学時代のクラスメイトと挨拶したりして時間を潰していた。

高校生になったものの、特にやりたい事も目指す目標もない。

というよりも、何かをする意欲がない。

まあ、適当に平和な日常を謳歌できればいいかな、と楽観している訳だが。

やることもないのでボーッと窓の外を眺めていると、教卓側のドアが開く音がした。

先生が来たかと思えば顔を上げると、そこにはどこかで見たことがあるような女子がいた。

長い髪、整った顔立ち、見覚えがあるのだが…、はて、何だっけ？
じっと見ていると向こうと目が合った。

「あっ…」

「？」

女の子の方は俺を見ると小さく声を上げた。

何だろっあの表情。

俺の顔に何か付いているのだろうか。

彼女は一瞬驚いたような顔をしたがすぐに何事もなかったかのように近くの席に座った。

そのあとも、あの驚いた表情が気になって自分の顔を触りまわっている内に先生が来てホームルームになった。

先生の指示に従い体育館へ移動、入学式が始まる。

校長や教育委員会の人のありがたいお話を聞き流している内に気づけば式は終了。

教室に戻ってまたもホームルーム。

ここで全員の自己紹介となった。

俺も適当に無難な挨拶をすまして他の奴らの紹介を聞く。

そして次はあの見覚えのある女の子の番だった。

「志野しのいちか一番です、東京の方から町枝に引っ越して来ました」

これは驚いた。

町枝は東京に比べたら田舎町もいいところ。

そんな処に引っ越してくる人がいたとは思わなかった。

「志野さん、趣味とか特技とか何かないかな？」

紹介があまりにも簡単すぎたからだろうか、先生が問いかける。

だが、その志野さんは

「特にありません。興味のあるものもないです」

バツサリと切り捨ててくれた。

「あなた」

「ん？」

ホームルームも終わり、またもボーっとしていたら急に話しかけられた。

誰について？あの見覚え少女、志野一香さんにだよ。

「あなたも同じ学校だったのね。しかも学年やクラスまで」

「…おう？」

どうやら俺と志野さんは顔見知りらしい。

しかしいつ、何処で会ったんだっけ？

いかん、思い出せない。

「…もしかして覚えていないの？」

「…申し訳ない」

「はあ…」

呆れられた。

いや待てよ、このなんだかよく分からない上から目線的な話し方。どこかで……。

「…ああ！テーブル岩のエスパー少女か！」

「…何、その覚え方」

第一印象で覚えていたら怒られた。

しかし一度思い出せばはつきり分かる。

入学前に一度だけであった見知らぬ少女。

それが志野さんだったんだな。

「あなた、さっきの自己紹介で何かをするやる気がないって言うていたけど」

「え、ああ、言ったね」

確かそんな感じのことを言った気がする。
事実だし無難だろう？

「何かあったの？」

「……何かって？」

何故彼女はそんな事を聞くのだろうか。
問いかける志野さんの顔は、何か悩むような、やり切れないような表情をしている。

「……いえ、何もなければ別にいいの」

「……」

何も無い、と言ったらまあ嘘になるのかもしれない。
事故でボクシングを失ってからは何に対しても必死になれなかったし、試しにやってみても長続きなんかしなかった。

だから彼女の問いに対する答は持っているわけだけど。
だからと言って右目の事を話す気にはなれない。

そりゃそうだろう。初対面ではないにしろ弘一のように仲の良い友達というわけではないのだから。

「志野さん」

「何？」

だからこの話はこれで終わりだ。
うだうだ悩むのはもう嫌だし、何より周りに迷惑をかける。
だったら新しい学校での生活を気楽なままに過ごしていこう。

「これからよろしく」

「え、ああ、うん」

いきなり言われたからだろうか、少し詰まった返事。
だがすぐに気を取り直すと、志野さんは改めて俺に向き直った。

「……………」

「…、何？」

「あなた、名前は？」

「さっきの自己紹介聞いてたんじゃないの!？」

内容は覚えているのに名前を覚えていない、というよりも聞いていないとは…。

いやまあ、俺も人の名前とか覚えるのは苦手だけれども。

「大津だよ」

「大津……、下の名前は」

聞くんだ。

あまり言いたくないからあえて言わなかったのに…。聞くんだ。
いやまあ、いいんだけどさ。

でもさっきの自己紹介の時だって初対面の人みんながするいつも通りな反応をたくさんもらった訳で。
要はあまり言いたくない訳で。

「…??どうしたの？」

「ええ、いやあ、まあ」

志野さんは何を言い渋っているのかわからない様子。
というか本当に聞いていなかったんだね。

「…夕姫」

「え？」

「…大津夕姫おおしゆつひめが俺の名前だよ」
「夕姫…」

名前を聞いた志野さんは少し考えている様な間の後

「女の子みたいな名前ね」

一番気にしている部分に遠慮なしで突っ込んできた。
泣きたい。

そうさ、そうさ、そうですよ！女の子みたいな名前だから言いたく
なかったんですよ！

姫だよ姫！？いやホント名前見ただけで俺を男と思った人にいまだ
に会った事がございません！

これが今の俺が一番気にしている切実な問題かもしれない。

だから俺の事を呼ぶ時は『ユウ』って呼ばれるか『大津』って呼ば
れるかなんだ。

それなのに……。

「じゃあ、またね夕姫」

今日俺は初めてクラスメイトにファーストネームで呼ばれました。
志野さんは別れを告げるとそのまま振り返る事なく帰って行った。
今日一日、というか今話したただけでだけ。

絶対に志野さんは性格悪いと思う。
だって夕姫って呼んだ時若干笑ってたし。

「帰るか…、どうしたユウ？」

「……弘一」

やって来た弘一に話しかける。

「……何で姫なんだろうな」

「……」

俺の問いに弘一は、軽く肩を叩くだけで答えを返してはくれなかった。

初日から今後の高校生活に不安を感じる一日になってしまったかもしれない。

【第一章】入学と親友と再開（後書き）

各キャラクターの名前といくつかの設定が出てきました。

実力不足でうまく表現できてないかもですね…。

意見・感想は歓迎いたします！

【第一章】グループの違い

新学期独特の緊張感や若干の高揚感があつた時期もすでに過ぎ、入学から一ヶ月も経てば流石に新しい環境にも慣れるというもので。周りのみんなもいくつかのグループに分かれて話したり勉強したりしていた。

一方の俺は、まあいつも通り弘一と二人で昼休みを過ごしている訳だが。

うちの学校は購買部はあるが学食が無い。

従つて中学の時に夢想していた学生食堂のある高校生活は入学と同時に消えた訳で。

購買で適当に買ったパンと紙パックのコーヒーをおとなしく教室で食べているという現状。

因みに屋上は生徒進入禁止なので、ドラマや小説などのような屋上での青春的昼食を送ることなどできない。

まあ、できたとしてもやらのだが。

別に教室の隅での昼食だとしても俺も弘一も特に気にはしない。

お互い静かな方が好きみたいだしね。

そんな俺たちのクラスでの評価……、というか立ち位置は、まあ良くもなく悪くもなく。

特別仲の良いという訳ではないが普通に話せるような友達が数人。

そんな感じ。

他の人から見たら『生徒A・B』みたいな、そんな存在じゃないかな？

クラスではいくつかのグループができている中、俺と弘一は何処にも所属していないで二人でいる。とはいっても別に仲間外れにされているとかじゃない。

さて、実はクラスのグループに入っていないのは俺たちの他にもう一人いる。

それが今俺の視界の隅で一人弁当箱を突いている女子、志野一香だ。彼女は入学式の日以来、他人とどこか距離を置いた…、というよりも突き放した感じの態度をとっている。

そんな彼女の態度が気に入らないのだろう、志野さんはどのグループにも入らず一ヶ月たった今でも一人でいた。

まあ、彼女自身が誰とも拘ろうとしないから構わないのかも知らないが。

さつき志野さんが誰とも拘ろうとしない、と言ったと思うけれど、それは少し間違っていた。

さて、今俺には一つの問題、というか頭を抱えたくなることがあるのだが。

「ねえ、夕姫」

それがこれだ。

目の前にいる彼女、志野一香女子は特に特別な感情を浮かべるでもなく俺の名前を呼んだ。

問題とはこれ。今現在俺を『夕姫』と呼ぶのは親父と志野さんしかない。

因みに俺は下の名前で呼ばれるのは好きじゃない。何かに因まなくても好きじゃない。

だからぜひとも直して頂きたいのだが。

「あのさ志野さん、俺の名前…」

「今話しかけたのは私よ」

「……ごめんなさい」

ちくしょう。

そもそも普段誰とも接点を持つとしない彼女が何故俺にだけ話しかけてくるのかわからない。

少し他の人より早く出会っただけで特別何かがあった訳でもない。何より彼女はやたらと上から目線だ。俺が何をしたと……。

「夕姫」

「…なにさ」

色々言いたい事はあるが言ったところで一切聞く耳持たれないのはわかりきっているので、相手の出方を待つしかない。

「あなたは今楽しい？」

「…また脈絡のない質問だなあ」

彼女はよくこんな質問をしてくる。

そんな時の俺の答えも決まって

「まあ、普通じゃない？」

これだ。

そう答えると志野さんは「そう…」とか言って離れて行った。

俺には彼女が何を考えているかはわからないけれど、別にわかっていなくてもいいし別に気にする事は無いと思っていた。

目下の問題はどうかやって志野さんに夕姫と呼ばせないようにするかどうかだ。

地味に真剣に悩みながら弘一が教室に戻ってくるのを待った。

とっておきの場所。

俺がそう呼んでいる海岸の岩と岩に囲まれたスペース。

その中央にあるテーブル岩に腰かけ俺は何を考えるでもなく海を眺めていた。

今日は日曜日。家にいてもやることなく、とはいえずつと寝ているのも良くないと思いい外に出て、今此処にいる訳だが。

此処にいてもやはりやることなんかない。

ただ離れた所から聞こえてくる波の音を聞きながら海辺特有の強めの風を体全体で浴びるだけ。

瞑っている右目に合わせて左目も閉じる。

聞こえてくる波の音、風の音、砂の流れる音。

それを感じ、暗闇の中で自分の居る場所を確認する。

しばらくそうしていると、今まで聞いていた音の中に何かが砂を蹴る音が混じった。

その音を確認かめるために閉じていた左瞼を開ける。

「あ……」

「あ……」

声が被った。

そこに居た彼女、志野さんは久しぶりに見た驚いた時の表情でこちらを見ていた。

此処に人が来るのは珍しいが、今思えば彼女と初めて会ったのもこの場所な訳で、そう思うと彼女が此処を知っていても何一つおかしくないというね。

「今日は俺の方が先だったみたいだね」

「……」

少しおどけた感じで話しかけてみたが、志野さんはいつもの冷静そ

うな、冷めた様な表情のまま俺の言葉を受け流す。
俺には彼女がわからない。

何故クラスで俺に話しかけるのか、何故他の人とは拘ろうとしないのか、何故この場所に来たのか。
やっぱり俺には彼女がわからない。
だから、聞いてみることにした。

「あのさ、志野さん」
「……何」

何か不機嫌そうだけど、良く考えたらいつも不機嫌そうなので気にしないことにする。

「何で学校では俺にだけ話しかけるの、他の人とは拘らないじゃん？」
「……」

少し直球過ぎた気もしたがそれでもいいだろう。
俺はただ聞きたい事を聞いただけなんだから。

「あなたは前」
「ん？」
「夢を諦めた事があると、言ったわね？」

それは俺と彼女が初めて会った時の言葉。

『あなたは、夢を諦めたことがある？』
その問いに俺は、ハッキリとでは無いけれどあると答えた。

「それがどうしたのさ？」
「……私もね、諦めた事はあるわ」

胸の奥の何かが痛んだ。

不意に湧いてきた違和感に首を傾げなくなる。

「音楽、やっていたの。ずっと小さいときから」

「…そう」

語る彼女の表情は何の感情も浮かばない、冷静なソレそのもの。その表情が何故か俺の心を苛立たせる。

「あの時は音楽で生活していくのが夢だったわ」

「…今は？」

追い込まれていく感じがした。

気付かない内に両手をキツく握りしめているほどに。

「さあ、もう諦めたもの」

「…ッ!？」

ギョツと。

痛みが胸を締め付けた。

つい表情に出そうになるのを必死で抑え込む。

「…自分で？」

「ええ、だから、似てると思ったの」

「…何が？」

「…あなたの夢も諦められる程度だったのでしょっ?」

一瞬。

本気で頭がどうにかなりそうになった。

事故に会う前も、目が見えなくなった後も感じた事のなかった衝撃。初めて感じる抑えきれないような感情。

それだけの何かが今の一言にはあったようだ。

風が流れる音がする。

吹き付ける風が次第に上った血を冷まさせて、冷静さを取り戻してくれる。

そうさ。

俺だってそうじゃないか、もう諦めたのだから。

彼女の言っている事に間違いがあるかと言ったら、まあ、無いだろう。

「……そう、だね」

「…ふうん」

いつまでも何も言わないのも悪いと思って答えたのだが、その答えに対して彼女はなんともつまらなそうな声で返してきた。もう何が何だかわからない。

「同意するんだ」

「…は？」

「私の言った事、何とも思わないんだ」

思ったださ、色々。

それこそ初めて感じた感情を抑えるのに必死で、問いに対する返事さえ曖昧なモノになってしまっくらい。

だが志野さんは酷くつまらなそうな顔をしていて。

「そうやっていつも他人の意見に従っているだけで、自分で何か決めようとしてない」

「……何だよ」

確かに俺はあまり意見は言わない方だ。それは目立ちたくないってのもあるし、あまり自分の意見に自信がないってのもある。

話す志野さんの表情はやはり感情を映しださない。

若干つまらなそうな、何か失望したような、そんな表情。

何故そんな顔をしているかはわからないが、彼女はそんな『嫌な感じの』表情で淡々と言い放った。

「ねえ、夕姫」

「…何？」

「そんな風にいつまでも中途半端な顔をしているのだから」

顔？

今の俺は、どんな表情をしているのだろう。

「だから私は、あなたが嫌いよ」

知らぬ間に爪の食い込んでいた拳は、血が滲んでいた。

風呂場の鏡で自分の顔を覗いてみる。

別に自分をカッコイイだなんて思っていない。そんなナルシスト野郎はまず嫌われるだろう。

ただ、昼間に会った志野さんの言葉が若干引つかかっただけ。

『そんな風にいつまでも中途半端な顔をしているのだから』
中途半端な顔、というのはどういう事だろう。

捉え方次第によってはとても失礼な事ではあるがああ志野さんが、

しかもあの空気ですういった意味合いで言ったという事はないだろう。

たぶん。

いやでも彼女は俺の事が嫌いって言うていたし。

そもそも『中途半端な顔だから嫌い』って実はかなり失礼な事なんじゃないだろうか。

たぶんそれだけでも怒っていい要素はあるよね。

まあ、そんな気にはなれないんだけど。

ただ、自分が中途半端というのはわかる。

ボクシングができなくなつてからは何をしても真剣にできず途中放棄。そんな事ばかりだったから。

そんな俺だからこそクラスでも目立たないように、他の人の意見に便乗するような生活を送つていた訳だけど。

それは、いけない事なんだろうか？

誰もがみんなの前に立てるようなカリスマ？のようなものを持つている訳でもない。

俺みたいに今まで持つていた目標をなくしてしまった人だっている。

そんな集団生活の中で全員にそれを求めるのは酷な事じゃないか。

いや、今の俺の心情で重要なのはそんな事じゃないんだ。

志野さん。

彼女の話していた『夢を諦めた』という事、問題はそこだ。

俺だつて諦めたかつた訳じゃない。できればずっと続けていたかつた。

だからこそ夢だつたし、夢で終わってしまったんじゃないだろうか。そこまで考えて気がついた。

なんだ、そういうことか。だからあの時の感情を抑えきれなかつたんだ。

俺の場合は『諦めた』んじゃない。『諦めるしかない』だつたんだ。

そして志野さんの場合は『諦めた』。

何より彼女は俺と自分が同じだと言つた。

彼女に何が会って、何を思い諦めたのかは知らないけれど、それでも自分で諦めたって事だ。

自分から諦めたか、諦める以外の道が無かったか。

同じ諦めるでも、かなり大きな違い。

だからこそ俺はあの時『憤慨』していたんだ。

今思えば、あそこまで何かに怒りの感情を示したのは初めてだ。

事故の時だって怒りよりも絶望の方が大きかったし。

だがこれでわかった。

志野さんのあの表情も、俺にだけ話してくるのも。

だから……。

「俺も、志野さんは嫌いだ」

うん、嫌いだ。

でも俺は、誰かを嫌いなまま一年間を過ごすのは嫌だ。

だから、多少の無茶をしてもこちらから動くしかない訳で。

まあ…、そうだった訳で。

明日からはしばらく平穏な学生生活はできない気がした。

【第一章】グループの違い（後書き）

課題をやりながらチマチマと書いてました…。

少し急ぎ足かもしれないですがこんな感じで行きたいと思います。
何か感想・意見がございましたらお願いします。歓迎です。

もっと文才がほしい……。

誤字があったので修正しました。（6 / 2 1 / 2 2 : 2 2）

【第一章】空模様

今日も空は快晴。それはもう見事なまでに晴れ渡っていた。最近ではもう少し太陽も休んでも良いんじゃないかか思っているが、どうやら俺の心遣いは遙か上空で地上を照らす彼には届かなかつたらしい。

何とも働き者な天体である。

後数日で梅雨に入り、職場の監督を雨雲に奪われる為に5月中にやれるだけやるつもりなのだろうか？

どうせ一ヶ月くらいでまた夏の空の主演になるというのに。

「晴れ続きというのも実は問題なんじゃないかと思うんだ」

「…まあ、確かに雨が降らないと困る事はあるが」

突然の俺の振りに弘一は一瞬遅れながらも答える。

澄み渡る空の下、現在二人で登校中である。

昨日の、とっておきの場所での志野さんとの出来事。そのあとに思った俺の感想やこの後にやろうと思っっていることなどを弘一に話し、聞いてもらう。

俺が話している間、弘一は黙って聞いてくれた。

「…という訳で、とりあえず志野さんと積極的に話してみようと思う」

「そうか、まあ、いいんじゃないか？」

「そうか？」

「ああ、何をするにもまず相手の事を知らないとい何もできんしな」

確かにその通りだ。

当たり前だけど、俺は志野さんの事はほとんど知らない。

だからまず話をしてみるのが一番だと思う訳で。

「それに、お前にとっても何かに対して積極的に行動するのは良い事だと思うしな」

「ん、どういうこと？」

「いや、気にしなくてもいい」

良くはわからないが弘一曰く俺の為にもなるらしい。

というか最初から俺がやりたいからやる事な訳で、いまいち弘一の言っている意味がわからなかった。

なんだか最近わからない事だらけだ、と隣に零すと。

「…そうだな、だがそれが当たり前前の事なんだ」

と、やっぱり弘一は良くわからない事を言ってくる訳で。

とりあえずは二人で今後の計画を立てながら学校を目指すのであった。

休み時間。

授業が終わると直ぐ志野さんはどこかに行ってしまう。

俺はそれをやや速足で追いかけて話しかけた。

「志野さん…」

「………何よ」

こちらを向き話しかけたのが俺だとわかると、志野さんは露骨に嫌そうな顔をした。

いや、まあ実際嫌いだって言われた訳だし、嫌なんだろうけどね。

「いや、ちょっと話でもしようかと」
「嫌」

そう言っつて前を向き歩いて行っつてしまっつ。
あわててそれを追いかけて話しかける。

「ちょ、ちょっと待っつてよ!」

「嫌」

「話くらい良いじゃんか」

「嫌」

さっきから嫌しか言っつていない…。

昨日までは自分から話しかけてきた癖に。

「待っつてよ!」

「っついでこないで!」

なんだかまるで俺が嫌がらせしているみたいじゃないか。
勘弁してもらいたいものだ。
結局女子トイレに逃げ込まれ、それ以上っついでいく事は出来なかつた。

昼休み。

「志野さん」

「……」

無言で席を立つ志野さん。そこまで嫌か？嫌なんだろうなあ…。

「まあ、待ってよ」

「…何なのよさつきから」

あからさまに不機嫌オーラを漂わせ此方を睨んでくる志野さん。だがココで引く訳にはいかない。

「いやさ、お昼一緒にどうかな？」

「絶対に嫌」

絶対がついた。

おお、絶対がついたよ、天国のおかあさん。ワンランクアップだよ仕事場の親父。

だが、引けない。引く訳には行かない。

「なんでさ？別にいいじゃん、お昼くらい」

「私はあなたとそこまで仲良くなった覚えはないわ」

「……人の事下の名前で呼ぶ癖に」

「うるさいわよ夕姫」

……正直心が折れそうだ。

それにしてもこの人はどうしてこつも上から目線なのだろう。やっぱり性格が悪いようにしか思えない。

「…何か失礼なこと考えているでしょう」

「しまった！そっいえばエスパーだった！」

「…はあ」

溜息つかれた。

そうしたいのはこっちだって…。

「もう行くから、絶対ッッッ対についてこないで」

絶対を酷く強調したセリフを残して志野さんは教室から出て行ってしまった。

何かもう疲れてきた。

放課後。

ホームルーム終了と同時に急いで志野さんは教室を出て行ってしまった。

俺はそれを急いで追いかける。

「すまん弘一、行ってくる!」

「ん、ああ、まあ頑張れ」

教室を出て廊下を見ると志野さんはかなり遠くに行ってしまった。
ていた。

それを急いで追いかける。

「志野さん!」

「…ッ!?何なのよさつきから!」

「まあ、待ってくれよ!てか歩くの早いよ!」

「知らないわよ!廊下を走らないで!」

「早歩きで追いついたから大丈夫」

「…気持ち悪い」

…かなり傷ついた。

いや、まあ俺も全力の早歩きで女の子を追いかける男何か見かけた
ら気持ち悪いと思うけどな。

「ついてこないで！」

「いや、少し待とうよ！」

「嫌！何なの、ストーリーカー!？」

「ちょ、違うっつの！」

「やめて来ないで、痴漢、変態!!！」

「やめんかバカモノツ!!！」

二人で騒ぎながら校門までついてしまった。

志野さんはそのままダッシュで逃げ出す。

俺も追いかけるが信号のところで結局撒かれてしまった。

なんだかどどん嫌われっぷりがエスカレートしている様な、そんな一日だった。

「何がいけなかったんだろうか？」

「…確実にやり方だろうな」

俺の問いに弘一はいつもの様に返してくる。声は何か呆れてるみたいだけだ。

しかし、昨日は『志野さんともっと話をしよう作戦』を実行した訳
だけど、悉く失敗、というか前よりも印象が悪くなった気がしな
い。

「…お前は不器用だな」

「中々失礼な事を言うね、親友」

「事実だろう？」

弘一曰く、俺は不器用らしい。
いやまあ、確かに自分で器用だとか思った事はないが、人に言われ
るほど不器用だとは思っていなかった。
若干、へこんだ…。

「まっ直ぐすぎるんだ、もう少し落ち着いて行かなければ警戒され
るのは仕方がないだろ？」

「積極的に話した方がいいと思って…」

「タイミングを計れと言っているんだ」

何だかんだで協力してくれる弘一のアドバイスを聞きながら今日こ
そはと決意を固めながら学校への道を歩いて行く。

空今日も快晴だ。

まいった。

朝の弘一との会話を参考に話しかけるタイミングを計っているんだ
が…。

全くわからない。

元々此処まで積極的に誰かと話そうとは思った事がなかった訳で。
いつ頃話しかければいいかが全く分からないという。

「こ、弘一い」

「…どうした？」

「いつ行けばいい!？」

「まったく…」

何だか最近弘一に頼ってばかりな気がしてきた。いや、コレでも自分でしつかり考えてんだよ？

でも人には得手・不得手というものが有ってですね、はい、すいません、僕が悪いです。

「弘一、どうすればいい？」

「そうだな・・・」

弘一は少し考えてから答えてくれた。

「何も、相手のタイミングに合わせなくてもいいんじゃないか？」

「どうということ？」

「ああ、少し言い方が悪かったな。つまり、相手に合わせるんじゃないかと、自分で話せるタイミングを作ればいいんだ」

「…難しいな」

「まあ、そこはお前次第だ」

でもなんとなくは解った気がした。

よく思い出してみよう。前までは志野さんとある程度は話せていたんだ。

どういう状況で？

「……ありがとな弘一、とりあえずやってみるわ」

「ああ、頑張つてこい」

頭の中で言葉を並べながら、俺は志野さんを探しに出た。

放課後。

志野さんを見つけたとき、彼女は既に校門の近くに居た。慌てて近づいて話しかける。

「志野さん！」

「……またあなたなの」

振り向いたその表情はかなり嫌そうだ。

まあ、予想はしていたけれどさ。

「話がしたいんだ」

「私はしたくないわ」

取り付く島もないってこういうことを言うんだろうか。

こちらは昨日から何故か必死だというのに、当の志野さんは聞く耳持たず。

だが、そんな事は気にせず俺も話を続ける。

「別に今此処でって訳じゃない」

「何処でも嫌なものは嫌」

「明日、あの場所で、さ！」

「…あの場所って何処よ？」

表情は不機嫌の色を貼り付けたまま志野さんが聞いてくる。

「俺らが初めて会った場所。海岸の、ほら、岩に囲まれた……」

「……行かないわよ」

「明日そこで待ってるからさ」

「だから行かないわよ」

志野さんが俺の提案を拒否するけれど、そんなの知ったこっちゃ無

い。

俺の提案は今回ばかりは受け取り拒否出来ないのさ。

「朝から居るから、来てよ?」

「だから!私には行かないのっ!」

志野さんの声を無視して追い抜き、自宅への帰路を急ぐ。
若干早足で。

「明日は休みだしさ、一日待ってられるよ!」

「人の話を聞きなさいっ!夕姫!」

後ろで何か言っているが気にしない。

人の名前を大声で叫ぶような人の言う事なんか聞きません。

「じゃ、また明日!」

そのまま俺は走り出した。

「ちよつと夕姫!明日雨降るわよっ!?!」

志野さんの若干焦った様な声を聞きながら、謎の高揚感を抱いて家
へと走りぬけた。

やはり空は晴れ渡っていた。

目を覚ます。

カーテンを開け窓の外を覗いてみると、昨日あれ程自己主張をして
いた太陽は厚く覆われた雲によって隠れ、空は一面のグレーで埋め

尽くされていた。

爽やかな目覚めとは行かなかつたみたいだ。

二階の自室から身支度を整えて一階に降りる。

時間は午前7時半。

休日の朝にしては早すぎるくらいだ。

普段仕事で忙しい親父はまだ寝ている。

料理、と胸を張って言える様なモノじゃないが、適当に朝食を作り消費する。

少し多めに作ったので、余った分をラップで包んで冷蔵庫に。

ほっとけば後で親父が勝手に食べるだろう。

そういえば休日にこんな早起きしたのも久しぶりだ。

ボクシングをやっていた頃は早朝の走りこみやストレッチなどで早く起きるのは当たり前だった。

今では昼まで寝てるのが殆どだったし、起きても特にする事無く時間を無駄にしている気がする。

前は嫌でも目が覚めたというのに、今では起きるのが辛くて仕方が無い。

馴れとは本当に怖いものだ。今日は良く起きられたな。

親父に書置きを残して家を出る。

戸締りの確認もしたし、後は約束、と言っても一方的だが、約束の場所に向かうだけ。

前を向くと強い風が前髪を攪い閉じたままの右瞼を刺激する。

さて行きますかね。

親父は書置きに気が付くだろうか？

『親父へ、来るか解らない待ち人に会いに行きます。ユウ』

見上げた空は鈍い色に曇っていた。

【第一章】空模様（後書き）

今回は少し短かったでしょうか？そんな事無いかな？

そろそろ第一章も終わりに近づいてきている…といいなあ。

次回もなるべく早めに投稿できるように頑張ります！

【第一章】雨雲と休日

【8：20】

とっておきの場所に到着して、いつもの様にテーブル岩の上に腰かけたまま海を眺める。

5月曇りの海の風。

朝という事もあるのか、身体が感じる寒さは嫌にはつきりとしていた。

少し薄着で出てきてしまったかもしれない。

もしかしたらずっと待っているというのはキツいかも…。

さて、彼女は来てくれるだろうか。

不器用と言われた俺は、この場所で待っているしかできない。

何とはなしに右の瞼を開けてみる。

俺の瞳はやはり光を映さない。

わかりきっていた事だ。この目はもう見えないのだから。

そっと右瞼を閉じて、まだ見えてくれている左目で空を見上げる。

灰色だなあ…。

いつもより荒い波の音。

いつもより早い砂の流れる音。

いつもより強い風の音。

左目を閉じて、いつもと若干の違いのあるこの場所の音を聞いている。

待ち人はまだ来ない。

【9：00】

随分と長い間目を閉じていたらしい。

目を開けると、変わらない灰色の空と海が映る。

今日の波は荒い。

町枝の海は、ただでさえ少し波が強い上に天候や風に大きく左右される為、俺が生まれる前からずっと遊泳禁止だ。

まあ、あんな波の中泳ごうと思う人なんていないんだろうけれど…。それにしてもだんだん退屈になって来た。

最初はいつまでも待つているなんて言っていたくせに、直ぐこれだ。いつもなら何をするでもなく気ままに座っているだけだから大丈夫なんだけれど、今回は誰かを待つという、また変わった状況だ。

良く考えれば、この場所で誰かを待つなんて事は初めてだ。やっぱり此処は俺にとっての特別な場所だ。

もう少し待とう。

いや、来るまで待とう。

待ち人はまだ来ない。

【11:30】

此処に来てから結構な時間が経った気がする。

空は相変わらず灰色で染まっていて、風もまた冷たいまま。

携帯電話で時間を確認する。

そろそろ昼だなあ…。

今思えば、来る当ての無い相手を待つのに何の準備もなしにやって来たのは明らかに失敗だったのかもしれない。

せめて何か食べる物とか持ってくればよかった。

別段お腹がすいているという訳でもないが、とにかくこの退屈な時間を紛らわしてくれる何か欲しいところだ。

溜め息を一つ、そのまま目を閉じ風と波の音に意識を向ける。

いつもどこか涼しげな感じの音は、今日だけは肌寒く感じた。

待ち人はまだ来ない。

【13:40】

世間では遅めの昼食、もしくは昼食終了といった時間帯。

俺はというと、相も変わらず一人テーブル岩の上で来るかもわからない人を待っていた。

朝からずっとおんなじ処に座ったままだったので流石に冷えてきた。少し身体を動かしたい方がいいかも。

そう思っ立ち上がり適当にストレッチを始める。

「お、何か調子いいかも！」

そのまま調子に乗って筋トレやらダッシュを思う存分行い、かいた汗でより一層風の冷たさを痛感する事になった。

寒いよう…。

待ち人はまだ来ない。

【15:30】

あまりの長時間耐久っぷりに逆に冷静になって来た。

良く考えたら此処に志野さんが来たとして、俺は何を話すんだろうか。

友達になってください、はなんか違うだろ。とは言ってもあんまりへヴィで重たいようなのもどうかと思うし。でも俺の事を話すとしたら、少なくともそんな空気にはなると思うし。

考えがまとまらない。

前までは良かった。ただひたすらにトレーニングをして、試合に勝つ事を考えていればよかっただけだったから。

無くして初めてわかる、自分がこんなにも不器用な人間だったとい

う事。

それから暫く、不器用な頭で何を話すか悩み続けた。
待ち人はまだ来ない。

【17:10】

気付くとかなりの時間悩んでいたみたいだった。
時間を確認するともうすぐ夕方。いつもなら太陽が空と海を赤く染
め上げようとする時間帯だ。

でも今日の空と海は、朝から変わらず灰色のまま。

俺の太陽への気遣いは一日挟んで時間差で届いたらしい。

考えもまとまらず、ただ時間が過ぎただけ。

するとポツリと頬に軽い刺激を感じた。

ゆっくりと、灰色の雲から水の粒が落ちてくる。

ああ、ついていない。雨に濡れるのはあまり好きじゃないんだけど
な。

だんだんと強くなるソレを肌で直接感じながら、それでも俺は残り
わずかな意地を貫き通すことにした。

できればこの雨と一緒に、この胸の苛立ちも流して行って欲しい。

待ち人はまだ来ない。

【20:05】

どれだけ時間が経ったのだろう。

初めは勢いも弱かった雨は、既に点では無く線でしか見えないでい
て、今はもう濡れていない所を探すほうが困難な自分の体は、寒さ
すらも曖昧なほど感覚が鈍ってきていた。

携帯電話も買い替えかもしれない。

今度は耐水性のある物にしよう。
それにしてもひどい有様だ。

豪雨という程ではないにしても、傘もなしでこの場所から一步も動
かなかつた俺には大ダメージだ。

明日風邪は確定かもしれない。

何でこんな事になってるんだろうか。

ふと過つた考えの答えを、回らない思考回路で必死になって探す。

志野さんが来ないから？いや、彼女は昨日来ないって言ったじゃない
か。

弘一の提案が間違っていたのか？そもそも弘一はアドバイスをして
くれただけで、此処にいるのは俺の意思と意地だから。

右目が見えないせい？それこそ今は関係ない。

じゃあなんでだろう。

暫く考え、スツと一つの答えが胸に落ちた。

そうだ、俺が不器用だからだ。

霞んできた半分だけの視界が、今まで捉えなかった形を捉えた。

傘を差したその形は、急ぎ足で大きくなってゆく。

そして、漸く待ち人が現れた。

「何してるの！」

やって来た志野さんは何故かものすごく怒っていた。

あれ、俺が悪いのコレ？

びしょ濡れのまま来たばかりの志野さんに怒られる俺。

何か理不尽な気がした。

「志野さんの事待ってたんだけど…」

「私は来ないって言ったじゃないっ…」

「でも、来てくれたじゃん」

「…ッ！それは…、あなたが…」

来ないと言っても結局は来てくれたんだ。

この結果だけでも待つていたのは正しかったみたいだ。

ただ少し来るのが遅いというのはある。その事を言ったら『あなた時間なんて言つて無かったじゃない』だそうだ。

こいつはうっかり。

「とにかく、来てくれてありがとう。結構ギリギリだったからさ」

「…もし来なかったらどうしてたのよ」

おどけた調子でお礼を言つてみると、やはり不機嫌な声で質問された。

「どうしてたつて…、そりゃ、来るまで待つてたけど」

「だから！それで来なかったら意味無いでしょ！」

当たり前、といった風に返したらすごく怒りだした。

どうやら思うところが食い違っているらしい。

それでも俺は自分の行動を変えたくはなかった。だから…。

「それでも待つよ。来なけりゃ来るまで…」

「…ッ！何で…」

志野さんの声が勢いを無くしていく。

それでも伝えなければいけない事もあるはずだから。

「話が、したいから」

「……話？」

だからこうやって待っていた。来るかもわからない志野さんを。そして彼女は来てくれた。だから話をしよう。此処で終わったら、何もかもが意味のない事になってしまふから。

「夢を諦めたって話…」

「……」

「君が何を思っただけをソレをやめたかは知らないけど、さ。だからこそ話してほしい」

「…何だよ」

「知りたいから。その上で一緒に考えて行きたいから」

冷静になってみれば、結構失礼というか言いづらい事を求めていると思う。

ただ雨に濡れて、何時間も待たされていた俺にそこまで冷静に考える思考力は無かった。

それに、志野さんは暗い顔で俯きながらも話し始めてくれた。

「私の親、お父さんとお母さんがね、二人とも音楽家なの」

「…へえ」

「お母さんがピアノ、お父さんがヴァイオリンの演奏者で、世界的にも結構有名なんだって」

音楽にはあまり詳しくないからわからないけれど、志野さんの話によると彼女のご両親は音楽家の中では知らない人はいないくらいすごい人達らしい。

世界ツアーなんかも行っているみたいで、なんだか別次元の人だ。

そんなご両親の影響で志野さん自身も音楽を始めたらしいけれど。

「私も楽器に触っているのは楽しかったし、将来は二人みたいにプロとして世界を回りたいとも思っていたわ……」

「……でも、何で？」

そう聞くと、少しの間を開けて彼女は答えた。

「……ピアノやってたんだけどね、お母さんと同じ」

「……うん」

「毎日練習して、大きなコンクールに出たの。音楽界の著名人も何人か来ていたらしいわ」

「……そこで、失敗したとか？」

そこで志野さんは首を横に振り。

「……演奏は成功したわ、これ以上ないくらいに」

「……じゃあ、なんで」

「……確かに演奏は成功したし、いろんな人が褒めてくれた。でも誰一人として私の演奏を聴いてはくれてなかったの」

「へ……？」

彼女の言っている事はいまいちよくわからなかった。

演奏を聞いたからみんな評価してくれたんじゃないか。

それを聞いてくれなかったとは、いったいどういう事だろう。

「……私のピアノを聴いた人の評価はね、『流石はあの人たちの娘』だったの」

「……」

「誰に聞いてもそんなのばかり、そこに私はいなかった……」

「それは…」

「その後も何度かコンクールに出て演奏したけれど、そこでも評価は同じ。有名な演奏者の娘だから当たり前だって…」

漸くわかった。彼女が夢を、ピアノをやめてしまった理由が。

何をしても評価されるのは自分の演奏では無くて音楽家の娘という部分。

そんな中で続けて行くのが嫌だったんだろう。

「その内ね、何だか嫌になってきちゃってね…」

「……」

「だからやめたの。そこに私は居なかったから」

「……」

ただそれは。

俺にとっては酷く些細なことで。

やっぱり俺と志野さんは同じでは無かったと確信するとともに。

今度こそ自覚できた確かな奇立ちが胸に芽生えて。

今の俺はそれを我慢して押しとどめる気も、無かった。

「…何だよ」

「え…?」

「様は逃げただけじゃん」

「なっ…何よ! あんたに何がわかるって…」

「わからねえさ! 諦める必要のないモノを自分で捨てた奴の考えなんかなあ!」

「!?!?」

感情のまま自分の胸の内をさらけ出す。
志野さんの言っている事は理解できるし、同じ立場だったら俺だって嫌だったと思うさ。
それでも彼女はピアノを続ける事は出来た。夢をまだ叶えられたはずだったんだ。
それを自分で諦めた。俺にとってそれはやはり許容出来はしなかった。

「確かに周りの評価が気になるのはわかるさ、でもそれがやめる理由になるとは思えない」

「……何よ」

「諦めたんじゃない、逃げたんだよ君は……」

「……ッ！！あんだだっけと同じでしょ、諦めたんでしょ！？」

叫び声をぶつけられる。

既にどちらも雨に濡れ、彼女の持つ傘は意味を成さないモノになっている。

彼女の叫びに俺はずっと抱えてきた俺の中の重たい部分を吐き出した。

「……諦めるしかなかったんだよ、俺は」

「……え？」

「右目がね、見えないんだ、俺……」

「……」

そして話します。

小さい頃からボクシングをやっていた事。それに人生の全てを懸けてもいいと思っていた事。コネや他人の影響もなく、努力と実力だけで評価をもらっていた事。そして、たった一回の事故でそれまでの全てとこれからの全てが無くなった事。

どこまで話していいものかと考えたりもしたが、話し始めると止まらず、結局全部話してしまった。

「…だから、仕方ないんだよ俺は」
「……そんな」

いつの間にか俺も志野さんも冷静さを取り戻していた。
どちらも顔色は良くないけれど、さっきよりは会話ができる。

「何に対しても意欲が無くなった、今までボクシングが全てだったから」

「……」
「理屈っぽくなるしか無かった、そうじゃないと自分に押し掛かった理不尽さで潰れそうだったから」

だから、何をするにも考えたから行動するようになった。

どんな事にも『訳』を求めるようになった。それでいて結局は興味を持たないまま考えるだけで終わる。
そうなるしか無かった。

「……ごめ…なさい…」
「…うん、いいんだよ、それが今の俺だから」
「…ごめん、なさい……」
「……うん」

涙を流して、彼女は呟くように繰り返す。

嗚咽とともに吐き出される後悔の感情。

その後も雨に打たれながら謝罪の言葉を繰り返す彼女の声を、もっとも近い場所で聞いていた。

やっぱり慣れない事はするもんじゃ無い。

「俺さ、思うんだけど」

「…何？」

あの後暫くして、志野さんと雲が泣きやんだ。まあ、結局は二人ともびしょ濡れで酷い状態なんだけれど。

お互いに胸の内を吐き出したからか、もう会話に抵抗なんて何もなかった。

「志野さんがピアノやめたのって、周りの評価だけじゃ無かったんじゃない？」

「え、どういう事？」

「えつとき、志野さんってご両親がすごい有名人だったんでしょ？」

「ええ、よく取材の人が来てた」

「それじゃないかな？」

「？」

つまりだ。そんな両親の娘という立場上、下手な演奏はできない訳で。周りは音楽関係の専門家、インタビュアーなんかも良く訪れたらしいし。そんな中で演奏してたらそりゃ責任とか感じちゃうでしょ。

そんな風に義務的にやってたんじゃつまらなくなるのは仕方ないさ。

「志野さんはさ、プロになりたいのは本当だったかもしれないけど、その時ピアノを弾くのはつまらなかつたんじゃない？」

「……」

俺の言葉を聞いて、志野さんは暫く考えた後に『そうかもしれない』

と呟いた。

つまりは、そーいった事な訳で。

やっぱり『訳』を求める理屈っぽいところはまだ治らない訳で。

「私も、何もやりたくないのかも」

「…じゃあさ」

そんな彼女に提案する。

今ならばつきりと言える、似た者同士の二人だからこそ。

「二人で見つけようよ」

「え？」

「やりたい事をさ。誰に言われた訳でもなく、何の義務も感じる事もなく」

「……」

「二人がやりたいと思った事をさ、高校生活3年使って見つけようよ」

「……やりたい事」

何でそんなこと言ったのかはわからない。

このまま何の意欲も持てないのは良くないと思ったのか、志野さんに同情したのか、ただ二人の会話の間が持たなかっただけか。

結局答えはわからなかったけれど、この時ばかりは『訳』なんて考えなくていいと思えた。

だって、隣に座っていた志野さんは、その時確かに笑っていたんだから。

【第一章】雨雲と休日（後書き）

投稿が遅くなってしまいました。

読んでくださっている方々はすみませんでした！

とりあえず今回で第一章は落ち着いたかな？

課題とかで大変だけど頑張っていきます。

いつでも感想や意見は歓迎です！

【第一章】エピソード

空は今日も快晴。

昨日の雨が嘘の様に晴れ渡り、中途半端に振ってくれた雨のおかげでいい感じに蒸し暑い。

休日明けの朝の坂道をいつもの様に下る。熱気の籠った風が閉じた右脇に当たる。

うん、暑い。

坂の下のいつもの場所で弘一と合流。軽く手を挙げて挨拶すると弘一はいつもの様に俺の右隣に並ぶ。

昨日は雨に打たれて寒かったというのに今日は蒸し暑い気温で汗が止まらない。

体調壊しそうだ。

因みに昨日は濡れ状態だった訳だが、何故か二人とも風邪は引かなかった。

まあ、それならそれで全然良い事なただけ。

弘一には昨日のうちに話を通しておいた。

二人だ話しあった事、少し言い合いになった事、それも解決したことで、二人でやりたい事を見つけること。

それと。

「ん、おーい一香！」

「大声出さないで」

彼女を名前で呼ぶことにした事も。

昨日の帰り際に名前で呼べと言われ、俺はそれを受けた。

それだけなんだけど、確かに距離は縮まった気がした。

ただ、一香の方も俺の事を名前で呼び続けるらしい。

一香の姿を確認すると、弘一は黙って俺の『左側』に移った。

そのまま一香は俺の『右隣』に並ぶ。

「おはよう夕姫、木下君」

「ああ、おはよう」

「おはよ、つてかやっぱり夕姫て呼ぶのか…」

「そうよ、最初からそうだったじゃない」

「いや、まあいいけどさ」

いつもの朝、いつもの風景に一人分の音が増えて学校への道歩く。今はまだ新鮮な気分だけれど、俺と弘一と一香と、三人で歩くこの朝がその内当たり前の日常に変わっていくんだらう。

「そういえばずっと右目だけ閉じてたのって訳があったのね」

「そりゃそうだろ、何だと思ったんだよ」

「いや、なんか変な癖なのかと」

「……お前なあ」

「…まあ、良いじゃないか」

一番の問いに俺が若干呆れて、それを弘一が苦笑気味で乗ってくる。そんな、何処にでもあるような会話が、今はすごく楽しいと感じる。

「そういえばさ、一香」

「何？」

「入学前に初めて会ったときさ、なんか歌ってたじゃん。あれなんて歌なの？」

初めて会った時。その時もあのとおきおきの場所。

俺が自分から変わっていきこうと思ったきっかけをくれたのもあの場所。

昨日二人で本音をぶつけ合って、そして今この時間を作ったのもあ

のとおきのおき場所。
思うとあの場所はいつも何かのキツカケをくれる気がする。
だからだろうか、あの場所で最初に聞いた一番の声。あの歌が気になっただけけれど。

「…内緒」

「何だよ、教えてくれてもいいじゃん」

「嫌」

「おーい、一番あ」

「嫌」

「…はあ、まったく」

弘一の呆れた感じの声は、青く澄んだ空に吸い込まれていった。
俺と一番はそれに気付かず言い合いながら歩く。

確かにこれから先、考えもなしにやりたい事を見つけてるなんて言っただけれど、ホントに何かが変われるのかは分からない。

けれどそれでも今の関係は悪くはないと思う。

わからない事だらけなのが当たり前、と前に弘一が言っていたけれど、それは今ならわかる気もする。

まずは理屈っぽく考えるのを直そう。その後何かを楽しむってことを実感しよう。

それで、一番と弘一と三人で高校生活を楽しんでいけばいい。

そうさ、色々難しく考えるには俺の視界は狭すぎるんだから。

「一番さーん？」

「嫌」

「ほら、そのペースだと遅刻するぞ」

弘一の声、一番の声、俺の声。

いつもの道は、いつもより賑やかだった。

【第一章】エピソード（後書き）

第一章、とりあえずひと段落です。

なんとかここまででは書けました。

大体4・5章くらいで終わらせ・・・られたらいいなあ。

完結目指して頑張ります。感想・意見はいつでも歓迎です！

【第二章】プロローグ（前書き）

第二章です。

やっぱり更新は不定期だと思えます…。

【第二章】プロローグ

町枝市の名物とも言える紫陽花が最も映える時期である梅雨も過ぎ、久しぶりに使命感に燃える太陽が必要以上に紫外線の押し売りをしてくる7月の昼時。

この熱気は全力でクーリングオフしたい所だが、どうやら返却サービスは実施していないらしい。

夏の時期だけ地球温暖化について真剣に考えられるなんて事はないだろうか？

俺はそういった人間らしい。

つまり何が言いたいかというと、要するに暑いのだ。

確かに夏が暑いというのは至極当然のことであり何一つおかしいことなど無いのだが、だからと言ってそれが苦で無いなんて事は無く、熱気に当てられた頭じゃまともな思考は出来ないというもの。

現在昼休み前4限の授業中。日光絶好調のこの時間帯の授業が数学というのは学校サイドの緻密に計算された嫌がらせと採って良いのだろうか。

せめてクーラーが欲しい。これが私立と市立の悲しい現実の差なのだろう。

おお、暑い。

「そういえば、もう少しで夏休みだな」

授業も終わり、いつもの様に一香と弘一と三人で昼食を突いていた時、何とはなしに呟いてみた。

「そうだな、今年は何か予定とかあるのか？」

「んー、俺は特にないな」
「私も」

弘一の問いに俺と一香は同じ答えで返す。

高校生になって最初の夏休み。とは言っただものの実際何かが変わる訳でもなく、やはり唯の長期連休程度の認識だけど。

でも、今年は何か色々やってみるのも良いかもしれないな。

「一香はどっか行ったりしないの？」

「私は、そこまでこの辺りを知っている訳じゃないから」

「ああ、そういえば東京から来たんだったね」

今一香は町枝に住んでいる親戚の人の家に住んでいるらしい。

なんでもご両親は世界ツアー中らしくて、最初は一香も一緒に行くとかいう予定だったそうだ。でも一香は日本の高校に通いたいと主張したらしい。それで親戚の居る町枝に越して来て、学校もココに落ち着いたそう。

「じゃあ、町枝を回って歩こうか？」

「なにがあるの？」

町枝なら生まれた時からずっといる訳だし案内は出来る。

若干興味があるのか、聞いてくる一香に夏の町枝ツアーを考えながら答える。

「そうだな、そんなに大きくないけれど祭りもあるし、隣町まで行けば海で泳ぐ事も出来る」

「それに、町内でも何かイベントがあるだろう」

「へえ〜」

俺の声に弘一も続く。

良く考えたら俺もそこまで意欲的に参加した事は無かったかもしれ
ないな。

今年の夏休みは、今まで注目していなかった身近な事にも視点を当
ててみようかな。

「おもしろそう……」

「だろ？夏休みは長いし、色々やっていこうぜ」

「一番の方も結構乗り気だし、やっぱりこういうのは楽しくなるね。」

「まあ、その前に試験があるがな」

「……おおっ……」

弘一の言葉に一瞬思考が停止し、そのまま一気にテンションがダウ
ンした。

「発ノックアウトだよ、ちくしょう。」

「……ま、まあ、なんとかなるでしょ……」

「夕姫ちゃんとやらないと赤点とるよ？」

「……辛辣デスネー香サン」

「夕姫馬鹿っぽそうだし」

「俺は今激しく傷ついた！」

本当に性格悪いなこの女。

そんな感じでギャーギャーと騒ぎながら、時間は過ぎてゆく。

いつもの様に一香が俺をからかいながら。

いつもの様に俺はそれに噛みつきながら。

いつもの様に弘一が俺たちに対して呆れながら。

三人での初めての夏を迎える。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0481m/>

Lost Pride

2010年10月17日20時02分発行